

人間社会と調和する未来の電子情報通信技術への期待

編集にあたって

編集チームリーダー 宮本 裕

あけましておめでとうございます。昨年は、青色LEDの発明と実用化に関して、赤崎勇氏、天野浩氏、中村修二氏がノーベル物理学賞を受賞する、という明るいニュースが世界を駆け巡りました。これは、日本の電子情報通信技術の人間社会への貢献が、世界に認められた慶事と言えるでしょう。今年は、くしくも“光とその技術の国際年（International Year of Light: IYL2015）”に当たります。現在から過去1000年まで遡り、近代のマイルストーンを半世紀ごとに振り返りつつ、光に関する科学・技術が人間社会に及ぼした歴史と未来を考える、記念の年です。

この半世紀で電磁波・光を駆使した電子情報通信技術は飛躍的な進歩を遂げ、今年で戦後70年の節目に当たる日本及び、世界の経済発展をけん引してきました。今後の電子情報通信技術は、より身近な存在として、人々のコミュニケーションの在り方や情報の使われ方を大きく変革し、今後の人間社会やライフスタイルに大きなインパクトを与えられていると考えられています。グローバル化・少子高齢化社会といった新たなキーワードとも向き合いつつ、“未来の電子情報通信技術”は、もっと人間社会と調和し、役立つことが期待されるのではないのでしょうか。

本特別小特集では、「人と技術との調和」という切り口で、電子情報通信技術を駆使し、アカデミアやビジネスの様々なシーンで活躍されている各界の方々から、10～20年後の未来の社会を見据えた電子情報通信技術への期待を御寄稿頂きました。

最初の記事では、小林哲郎氏に社会科学的な立場から、技術革新と人間社会との調和に関して、総論を解説頂きました。次々と生み出される技術と人間社会とが調和してゆくための、社会制度や社会科学的事後検証の可

能性が述べられています。次に、飯吉透氏には、インターネット環境さえあれば世界中どこでも無償の教材から学ぶことのできる、オープンエデュケーションの世界的な潮流について解説頂きました。日本の高等教育における課題と、電子情報通信技術の果たす期待が述べられています。続いて山崎直子氏には、宇宙科学・ビジネスの現場の立場から、今後の電子情報通信分野への期待を述べて頂きました。次の半世紀では宇宙空間がより身近なフロンティアとなっていくでしょう。最先端電子情報通信技術に命を預けながら科学の最先端に挑戦する現場ならではの視点が紹介されています。塚田信吾氏には医療従事者の立場から、ウェアラブル機器と情報通信技術の医療健康分野への応用とその将来像について、解説頂きました。ますます身近になっていくウェアラブル機器と情報通信システムがもたらす様々な可能性について、多くの具体的な事例が紹介されています。江渡浩一郎氏には、電子情報通信技術をフルに利用し、ユーザ参加という視点を加えた新たな研究の場の創出への挑戦として、ニコニコ学会βでの活動を御紹介頂きました。新たな価値創出に至る背景や狙い、最近の様々な試みを解説して頂いています。またReiko A. MIURA-KO氏には、電子情報通信技術が変えるベンチャービジネス創出という、新しい起業ビジネスの潮流について解説頂きました。Micro-entrepreneursというキーワードで、誰でも起業できる時代の到来と新しい起業投資の形について、最新事例を御紹介頂いています。最後に、本会の学術奨励賞を受賞され、未来社会の検証者として明日をひらく若い世代の方々の、未来へのメッセージを紹介しています。

未来の電子情報通信技術が放つ新たな光が、今後も人間社会の未来を明るく照らし続けることを、新年の願いとしたいと思います。

特別小特集
編集チーム

宮本 裕
新庄真太郎

櫻田 英樹
青木 啓史

栗本 崇